

⑭ 『瓢箪と下駄』

ミチが差し出す通行証には目もくれず、瓢箪は詰所に引き返そうとした。その背に向かつて

「ここに傘狂先生の添え書きも有ります。どうぞご覧になって下さい。」と叫んでミチは瓢箪を呼び戻そうとした。

ところが

「さんきよう？誰じゃそりゃあ？そんなもんは知らん。帰れ、帰れ！」と瓢箪は全く取り付く島が無い。

するとそこに

「何事じゃ？」と言いなながら、下駄に黒の鼻緒をたてたような顔の別の役人が現れた。角張った額から太い眉が八の字に下がって、その太い眉毛の中に丸く小さな目が埋もれている。

「誰の書状じゃと？」と言いなながらミチの手から添え書きを受け取った下駄は、内容を検めてはみたものの首をかしげるばかりだった。

ほんがしら

「間もなく番頭がお見えじゃ。相談してみるから暫くそこから待ってる。」そう言つて下駄は、添え書きを右手にヒラヒラさせながら詰所に戻つていった。

傘狂先生を知らないとは、と意外な気がしたが、木戸の前に置かれた縁台に腰をおろすとミチは急に空腹を感じた。それは、通してもらえない事への腹立ちの所為でもあるようだ

つた。

通さぬというならそれで結構、ホトトギスの声でも聴きなから此処で待つ事にしよう。上役はきつと分かつてくれるだろう、と高を括つていたミチだったが、四半時も待たされるとさすがに不安になって来た。

瓢箪は関所を通る人の検閲に忙しいらしく、ミチには目もくれない。縁台に腰を降ろしたまま上体を屈めて木戸の内側を窺つてみるが、下駄が現れる気配は一向に無い。

なおも奥を覗き込もうとするミチの背後で男の声があった。「先ほどからしきりに中を覗つているようだが、如何なされた？」

その声をかけたのは笠を目深に被り両刀をたばさんだ武士だった。どうやら所用の途中らしく、背中に余り大きくはないが、荷物を背負っている。

待ちくたびれ不安になっていたミチは、気にかけてくれる人が現れて一気に気持ちちがゆるんだ。通してもらえず待ち続けていることを話すと

「私は尾張藩の者だが、傘狂の高名は存じておる。ちよつと待つていなさい。私が話をしてみよう。」

両差しの武士は瓢箪に通行証を示しながら歩を緩めずに詰所に向かった。

程なく

「番頭は所用が有つてまだ到着していないもので・・」と弁

解する下駄を引つ立てるように先刻の武士が詰所を出て来た。
た。

「通行手形に傘狂の添え書きまで揃っている。足止めをする理由はあるまい。尼さまを通して差し上げてはいかかな？それにだ、傘狂の名を知らぬとは、そこもと達の底が知れるというもの。些か恥ずかしゅうはござらぬか？」

そう言われた瓢箪と下駄は、他藩の者とはいえ高官らしい武士にまるで頭が上がりぬ気配で、先ほどの横柄な態度とは打って変わって小さく縮こまってしまった。

役外の者が出過ぎた真似をした事は番頭に会って説明をしておくから気にせずに行くようにと促されて、ミチは被っていた笠の紐を解くと、瓢箪と下駄を横目で見ながら武士に丁寧な頭を下げた。

結局半時以上を無駄にしたミチだったが、陽のある内に何としても愛発(あらち)を越えておきたかった。美濃の俳人達から、越前に到る山越えの厳しさは何度も聞かされていた。

それは親鸞聖人の『越路なるあら血の山に行きつかれ足も血しほに染めるばかりぞ』の歌からもおよそ想像はついていた。

足が血に染まったというからには、相当の覚悟を要する山越えになりそうなのに、随分と無駄に時を潰してしまったものだ。

だけど、あのお武家に助けられなかったら、まだ関所の前

で番頭の到着を待ち続けていなくてはならなかった。

助けられたのは幸運だった、とミチは幸先の良い旅立ちを喜ばなくては、と思った。